


(様式3)

平成29年度「オリンピック・パラリンピック教育推進校」

事業実施報告書

実践事業	【 III 】	I～Vを記入して下さい。	
学校名	京都市立西京極西小学校	全校生徒数	249名
実践学年、部、講座等	第5学年（男子29名・女子17名） 授業教科等 学級活動（全4時間）		
目標（ねらい）	陸上競技に興味をもつ児童が多く、校内でのマラソンにも関心が高いが、視覚障害者の中にもマラソンに取り組む方がおられるということを知る児童は少ない。本事業を通して、児童が視覚障害者のスポーツに関心をもつとともに、マラソンの伴走を行う方の存在を知り、講義や伴走体験を通して、スポーツボランティアへ参画しようとする態度の育成を図る。		
実践内容	<p>1 視覚障害者のランナーについて知る</p> <p>近年のマラソンブームによって、マラソンやランニングが身近なものになってきており、マラソン大会に参加したり、応援したりすると視覚障害者ランナーや伴走者を見かけることがある。そこで、講師依頼をするために、賀茂川パートナーズ会長の斉藤浩史さんと連絡を取ると、先生もいっしょに走ることで分かることがあるのではないかと話だった。実際に賀茂川パートナーズの練習会に参加し、視覚障害者の方と伴走を行った経験を児童に伝える形で、導入を行った。授業の中で、伴走に必要な伴走ロープを作成した。伴走ロープは、ナップザックなどで使う丸紐を三つ編みにしたものであるが、一人一人が紐を組む活動を通して、伴走への思いを高めていったようであった。その伴走ロープを実際に使って、視覚障害者ランナーと走ることを伝えると意欲的な声が多く聞かれた。</p>  <p>2 伴走体験を行う①（児童同士で）</p> <p>教員の指導のもと、アイマスクを着用して児童同士で伴走体験を体育館で行った。曲がる方向や路面の様子などを指示しなければならないことを伝えた。体育館では、指示する内容が少なく最初の練習としては適していたが、それでも児童は戸惑っているようであった。</p>		

3 視覚障害者及び伴走者のお話を聞く



視覚障害者ランナーの斉藤浩史さんと伴走者の斉藤貴佐子さんに学校へ来ていただき、お話を伺った。視覚障害者も健常者と同じように走りたいという思いをもつ方がいること、ボランティアではなく走る仲間なのだとということ、

マニュアルよりも慣れが大事で難しく考えず挑戦してほしいことなどを教えていただいた。また、賀茂川パートナーズに所属する和田伸也選手はロンドン、リオのパラリンピックに出場し、メダルを獲得しており、東京パラリンピックの有力候補だということや井内菜津美選手は東京パラリンピックの強化選手だということは話していただいた。

4 伴走体験を行う②（視覚障害者の方と）

お二人のお話を伺った後、体育館へ移動し、実際に斉藤さんと伴走体験を行った。視覚障害者ランナーは伴走者のことを信頼して走っているということを自覚するとともに、斉藤さんが自分たちのロープから伝わる情報で走っていることを体感した。



実施上の留意点等

- ・講師となる視覚障害者ランナーや伴走者は、他の仕事をお持ちであることが多く、平日に来校するためには、綿密な日程調整が必要である。
- ・教員が練習会等に参加し、実際に視覚障害者ランナーの伴走を行うことは、斉藤さんが最初におっしゃったように大切なことであると感じる。教員の走力を問わず、参加する方がより実感を伴った学習になる。

主な成果 (分析結果)

- ・授業の前は、伴走のことは何も知らなかったけれど、斉藤さんのお話を聞いたり、伴走体験をしたりすることで自分も伴走がしてみたいと感じました。
- ・お二人のお話を聞いて、東京パラリンピックを見るのが楽しみになってきました。
- ・伴走することは、とても難しいことで責任重大なことだと思っていたけれど、お話を聞いて楽しく行ったらいいということが分かりました。
(斉藤さんの補足) →楽しく行えばいいのですが、責任感をもって行っていますよ。

次年度以降への課題等

一つ目は、今回の授業で児童たちが感じた気持ちを持続させることが必要なことである。東京オリンピック、パラリンピックが行われる時まで、できるだけモチベーションを維持できるようにしたい。

二つ目は、次の学年で実施する際、留意点でも述べたように、講師との日程調整や教員が経験を積むことを意識しなければならないことである。